

重兼芳子「闇をてらす足おと——岩下壯一と神山復生病院物語」(春秋社)を読む

中村 弓子

作者がこの本を書くきっかけとなったのは、昭和万葉集に四首ほど掲載されたハンセン病の男性の歌人がいるということを知って、神山復生病院に出かけておこなった取材である。病のため盲目のその歌人は、朗読テープで聞いた作品を通じて既に作者と旧知の間柄であると知ると急に親しさを示し、そして堰を切ったように四十六年前に亡くなった岩下神父のことを語り出したのだった。ただひたすら神父の面影を追って話し続けるその歌人の顔を作者は茫然と凝視し、一人の人間

の中に四十六年間も生き続け、苛酷な肉体的条件と闘う支えになっている岩下神父とはどのような人か、と心惹かれ、取材はそのまま岩下神父の取材になっていったのである。これは、生き証人たちの気迫に押され、逃げ腰の時は引き戻されるようにして「書かされてしまった」本だ、と作者は言う。

さて、作者がそのようにして我が意ならず書かされてしまった岩下神父像がどのようなものかを見る前に、今ここで私自身が岩下神父という人物に心惹かれた個人的なきっかけ

について簡単に触れるのを許して頂きたい。まず第一にそれは、私があるキリスト教関係の施設で見た壮年期の岩下神父の写真であった。その眼は内側から燃える火に輝いている。と同時にそのまなざしは、こちらの存在を突き抜けたところを凝視する鋭さを持っている。まなざしに宿るこの二つのものの共存が私に稀有の人物を垣間見させたのである。もう一つのきっかけ、それはフランスの哲学者モーリス・ブロンデルと文学史家アンリ・ブレモンという二人の巨人の間に交わされた四十年近くにわたる往復書簡を収めた三巻本である。その中にたった一人の日本人が登場する。それが他ならぬ岩下神父なのである。一九二〇年という年にブロンデルは、当時留学中の岩下神父についてブレモンに次のような言葉で語りかけている。「私の喜びである日本の青年、岩下壮一にもう会いましたか」

大ブロンデルに「私の喜び」と言わせるのはどのような人物だろうかと思ったのである。さて、その岩下神父は日本に帰国後、囑望されていた中世哲学者としての研究活動の多くを犠牲にして、ハンセン病の神山復生病院の院長の仕事に携わることになった。その院長としての岩下神父の人物像を本書は、主人公のハンセン病患者の置かれた深い闇の側から見える姿として描き出している。その中でも特別に印象的な三つの闇の情景があり、それはそのまま岩下神父の最も印象的な姿となる。

主人公の「わたし」の時代にはハンセン病になると患者は巡査に連れて行かれて、薬や注射で殺されるといふ噂があり、そのため「わたし」は祖父によって土蔵にかくまわれて、日中は薄暗い中で息をひそめて過し、夜だけ外に出るといふ夜行動物のような生活を

していた。そのような遺棄された悲嘆の闇の中に、ある日、扉の方から、「起きて下さい、眼をさまして下さい」と呼ぶ静かで哀しげな声がある。祖父の前に立ったその人は、ためらう様子もなく土蔵の中に入ってくると「わたし」の手を取って外へ連れ出しながら言った。「夜が明けぬうちに、村の人が起きてこないうちに私と一緒に行きましょう。そのまま私について来なさい。あなたは人間の中でもっとも美しい人になることができます。」それが岩下神父であった。

第二の闇。それは情念の闇である。「わたし」はふとしたきっかけで目にした女子棟のある女性に夢中になる。しかし、この病院では結婚は禁じられていた。患者が子供を持つことが許されなかったのはこの病院でも同じだったが、結婚しても子供を産むことを禁じるというような自然の摂理に反することを

は神の摂理にも反することとして、この病院では結婚そのものが受け容れられなかったのである。相手の女性は、結婚が許されないことと、自分の病気が進行していることに絶望して醜くならないうちに一緒に死にたいと言う。熱で喘いでいるその女性を背負って深夜、東海道線に向って「わたし」は急ぐ。その時うしろからもう一つの足音がして、突然その黒い影が背中を抱き取り道端へ横たえた。岩下神父だった。そして神父は「わたし」の足もとにひざまずいて言ったのだ。「あなたの気持はよく分ります。人を愛するのは尊いことなのです。けれども今はいけません。どうか許して下さい。」

第三の闇。それは病院の毎夜、毎夜の見廻りの闇である。岩下神父は必ず深夜に一度見廻りをした。弔いのあった夜は患者の動揺を考えて深夜と明け方の二度、自殺未遂をし

た患者の部屋のの前ではその恐れがなくなる時期まで毎夜ひざまずき頭を垂れて祈っていた。「わたし」たちは布団の中でその足おとを聞きながら、足おとが何かを語りかけてくるような不思議な安堵を覚えてぐっすり眠ることができたのだった。闇は岩下神父の足音ゆえに愛の闇となり、岩下神父の死後も、「わたし」の失明後も、聞えてくるその足音が「闇をてらす足音」となったのである。

しかしそれにしてもなぜ岩下神父は「わたし」の中に四十六年も生き続け、支えになられたのか。それは、「わたし」が情念の闇から無理矢理ひき出されたあと「神父さまも男なら、裸のままの気持をさらして下さい。生きたいように生き、愛したいように愛せばいいではありませんか」と詰問したのに対する答の中に垣間見られるように思われる。「人間の心の奥には他の人間が立ち入ることので

きない領域があるのです。イエズスさまの光はそこまで届きます。他の人には見えなくても、私はイエズスさまにすべてをさらしています。露わに、むき出しにされています。それだけでいいのです。」人間の孕む本質的な矛盾に対して鋭い意識を持ち、それに引き裂かれながらも、それをそっくりそのまま絶対者に託し捧げるその岩下神父の信仰のうちのありようが、我が意ならず過酷で矛盾した人間的条件の中に投げこまれているハンセン病患者の「引き裂かれ」と「捧げ」に深い所で通い合い、支え合ったのだ。岩下神父の内なる火に輝くと同時にこちらの存在を突き抜けたところを凝視するようなあのまなざしは、自分自身の中の心の奥の「イエズスさまの光が届く」ところから、相手の中の「イエズスさまの光が届く」ところを見るそのまなざしなのだろう、と今私は思う。

岩下神父が死を覚悟して中国旅行から帰ったとき、医師の警告を無視してまで、私の帰るところはあそこしかないと言って神山復生病院に直行することを望んだのは、ハンセン病患者の「引き裂かれ」と「捧げ」の場である。ここそが、岩下神父にとって最も真理に近い場であったからだろう。そして岩下神父が、囑望されていた学者としての仕事をこの病院の仕事のために犠牲にしたのも、この病院の中に何もものにも代え難い真理との直接の出会いを見出したからだったのだろうと思う。

この「引き裂かれ」と「捧げ」は究極的には十字架上のキリストにまで連なってゆく。岩下神父の臨終の時に患者たちが歌った聖歌の言葉がそれを告げている。「神の子は人となり、われらの罪をゆるすため、十字架の死に至るまで、しのびましぬ苦しみを」

この本の最後に「わたし」が述べる言葉に耳を傾けよう。それは神山復生病院が岩下神父と患者の「引き裂かれ」と「捧げ」ゆえに逆にどのような特権的な場となりえたかを告げている。

「イエズスさまがどのようなお方なのか、いまだに分りませんが、岩下神父が亡くなった直後の顔が鮮かに思い出されます。頬がこけて、ひげが伸びて、深い考えの中に沈んでいるような顔でした。あの顔がわたしの肩のところ飛びこんできて、四十五年間も離れないのです。今ではあの顔がイエズスさまなのか岩下神父なのか、重なり合ってしまった。それどころか、無惨で醜いはずのわたしの顔までが合体して、透明でかたちがなく、生命体のようなものになってしまったような気さえしてくるのです。」

(お茶の水女子大)